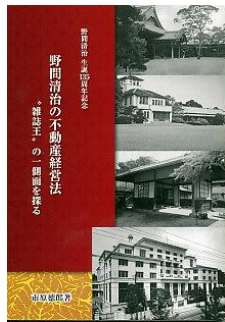


好奇心で調べ、気力と体力で綴る!

● 図書館に触れ、文字から文化に触れられる喜び!

先週は、傘寿(80歳)を超えた先輩たちからご自身が綴られた寄稿文をいただき勉強させていただきました。お一人が講談社第4代社長の故・野間省一氏の社長秘書等を歴任された市原徳郎様(高4回)から『没後31年 野間省一の転機と決断(第3回、第4回)』(講談社社友会会報)、『野間省一社長と私(第2回)』(野間清治顕彰会だより)の2編をいただきました。市原様とは、星野和央氏(高4回)が主催される勉強会「グループ92」で知り合い、2013年に『野間清治の不動産経営法“雑誌王”の一側面を探る』(野間清治顕彰会)を上梓され、2014年の新年会では野間清治氏の生涯を学ばせていただきました。今回は、その講談社の中興の祖と言われる野間省一氏のお話しでした。



* *

野間省一氏: (1911-1984) 明治44年4月9日生まれ。南満州鉄道にはいるが、野間左衛(さえ)の養子となり昭和16年講談社に入社、20年社長となる。「群像」などの雑誌をはじめ文芸・美術・学術書などを刊行、同社を大手出版社へ発展させた。また、日本書籍出版協会会長、ユネスコ・アジア文化センター副会長などをつとめた。昭和59年8月10日死去。73歳。静岡県出身。東京帝大卒。旧姓は高木。〔コトバンクより引用〕

* *

今回の『野間省一の転機と決断』では、昭和30年代に出版界をリードされ、日本の出版会全体で国際化を目指した頃の野間省一氏の強い信念と情熱、桁外れの行動力が綴られていました。『野間省一社長と私』では、市原様が秘書として間近に接せられた頃の思い出が綴られています。野間省一社長を通して、30数年過ぎられた講談社での市原様の歩みが手に取るように分かるエッセーでした。

野間省一社長が昭和41年にアジアを歴訪し、アジアの「図書飢餓」に触れ、この問題を解決しようと奔走される姿も描かれていましたが、7月末にお目にかかったアジア教育友好協会理事長の谷川洋理事長の姿を思い浮かべました。勉強できることに瞳を輝かす子ども達が居るように、本を読みたくても機会や買うことができなかつたり、印刷技術が行き渡らなかつたりと、さまざまな課題を克服するために奔走された野間氏の姿が重なりました。私たちは、図書だけでなくさまざまなメディアを通じて文化にふれることのできる環境に感謝しなくてはなりませんね。 * *

● 好奇心で調べ、気力と体力で時代に語り継ぐ!

もうお一人が、これまでも何度か“いも”に関するお便りをいただいている浦高時代の恩師・井上浩様(日本いも類研究会会長、85歳)です。今回は川越ペンクラブが発行する「武蔵野ペン166号」をお送りいただきました。この中で、井上様は『川越唐棧が世に出るまで』を綴られています。



* *

◆ 川越唐棧が世に出るまで

川越ペンクラブでは毎年総会終了後、会員による20分ほどの卓話がある。2016年はわたしが依頼されたので、最近の川越で話題になることが多くなった川越唐棧が世に出るまでの長い間のさまざまなことに触れさせてもらった。話が終わった途端に思いがけないことが起こった。数人からこう言われた。「唐棧って、インドのサントメ縞のことだったんですね。それなら、それは北原白秋の詩集『邪宗門』の最初の詩、邪宗門秘曲にありますね」と。常識知らずのわたしはびっくりした。それをまったく知らなかったのととても恥ずかしかった。と同時にサントメ縞が白秋の詩にどういう風に入っているのかをすぐ知りたくなった。すると、それなら暗記しているという千木良宣行氏が紙片にすらすらとこう書いてくださった。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蛮の浅留縞を、はた、阿刺吉、珍夕の酒を

ひどく遅まきながら、白秋の有名な詩に棧留縞(サントメジマ)があることがわかって嬉しかった。それに力をもらい、改めてその歴史を振り返ってみることにした。

* *

「はじめに」で調査のきっかけが綴られ、「インド東海岸のコロマンデル地方」「オランダ東インド会社」「カピタンの参府」「唐棧がわが国で好まれたわけ」「川越唐棧の誕生」「幻になった川唐の復活」と続きます。私が驚いたのは、85歳になられてもとことん調べられる気力と体力です。私のような青二才が暑くて疲れたと弱音を吐いてはいけませんね。浦高の先輩達と恩師の姿に敬服です!